

学会記事 Newsletter

I. 臨床遺伝学認定医制度研修施設の承認

下記の30施設の申請があり、審査の上承認した。承認期間は1991年（平成3年）4月1日～1998年（平成10年）3月31日である。

施設番号	施設名	指導責任医
01	北海道大学医学部 同 附属病院	近藤喜代太郎（公衛・教授）
07	山形大学医学部 同 附属病院	林 正（小児・教授）
08	東北大学医学部 同 附属病院	多田啓也（小児・教授）
12	群馬大学医学部 同 附属病院	古川 研（法医・教授）
13	筑波大学医学部附属病院	浜口秀夫（人類遺伝・教授）
16	帝京大学医学部	木田盈四郎（小児・助教授）
19	東京大学医学部	日暮 真（母子保健・教授）
33	山梨医科大学	浅香昭雄（保健Ⅱ・教授）
39	福井医科大学 同 附属病院	藤木典生（二内・教授）
41	岐阜大学医学部 同 附属病院	折居忠夫（小児・教授）
43	名古屋市立大学医学部附属病院	和田義郎（小児・教授）
50	京都府立医科大学 同 附属病院	三澤信一（三内・講師）
52	大阪医科大学 同 附属病院	堺 俊明（精神・教授）
54	大阪大学医学部 同 附属病院	高井新一郎（バイオメディカルセンター臨床遺伝・教授）
59	鳥取大学医学部	竹下研三（脳小・教授）
60	岡山大学医学部附属病院	橋原幸二（小児・講師）
63	広島大学医学部 同 附属病院	大浜紘三（産婦・教授）
	原爆放射能医学研究所	
64	山口大学医学部 同 附属病院	梶井 正（小児・教授）

施設 番号	施設名	指導責任医
65	徳島大学医学部附属病院	川井尚臣 (一内・助教授)
67	高知医科大学 同 附属病院	山野利尚 (二内・助教授)
70B	九州大学生体防御医学研究所 同 附属病院	鈴木友和 (体質代謝内科・科長)
72	久留米大学医学部 同 附属病院	芳野 信 (小児・助教授)
74	長崎大学医学部 同 附属病院	新川詔夫 (原研遺伝・教授)
75	熊本大学医学部 同 附属病院	松田一郎 (小児・教授)
77	宮崎医科大学 同 附属病院	大堂庄三 (小児・助教授)
79	琉球大学医学部附属病院	成富研二 (小児・助教授)
81	国立小児病院小児医療研究センター	中込弥男 (センター長)
83	埼玉県立小児医療センター	福嶋義光 (遺伝科・医長)
84	神奈川県立こども医療センター	黒木良和 (遺伝科・部長)
86	大阪市立母子センター	荻田幸雄 (産婦・副所長)

(梶井 正)

II. 学会賞および奨励賞 選考委員会

1991年度 人類遺伝学会賞および奨励賞の選考委員会が、本年3月19日に東京で開催された。

本学会評議員より推薦のあった候補者について 慎重審議の結果、九州大学生体防御医学研究所 西村泰治助教授の「免疫応答の分子遺伝学的研究」、ならびに国立小児病院小児医療研究センター 中堀豊研究員の「アメロゲニン遺伝子のクローン化と塩基配列の決定」に対して奨励賞が贈られることになった。また、本年度の学会賞については該当者なしと決定された。(庶務幹事 今村 孝)

III. 本学会員の叙勲

小西俊造会員(元 山口大学学長)は1991年春の叙勲受章者に選ばれ、勲二等旭日重光章を受けられました。また、柳瀬敏幸評議員(元 福岡通信病院長)は、勲二等瑞宝章を受けられました。ここに本学会員一同と共に祝い申し上げます。(会長 松永 英)

IV. 名誉会員の訃報

本学会名誉会員 栗野玄佐武先生には、1991年4月14日、仙台市立病院にて死去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。(会長 松永 英)

V. 第8回 ICHG 出席のための旅費補助にかかわる応募者の選考について

昨年8月の福井大会で、第8回国際人類遺伝学会に出席を希望する若手研究者5~6名に、一人当たり20万円の旅費補助を行うことを決議し、その旨を本誌(35: 271-272, 1990)に公告したが、今年2月末までの応募者が定員枠に達しなかったため、応募期限を4月13日まで延長し、改めて全評議員に通知して若手研究者の推薦を依頼した。その結果、応募者が11名に増えたので、まずこれらについて応募資格を審査し、会長の判断で全員を適格者と判定した。ついで6名の理事による投票(候補者が理事と同じ所属の場合は、該当者に対する投票権なく、得点の平均値で順位を決定する)の結果、次の5名に旅費補助を行うことに決定した。徳永勝士(東大医)、松原洋一(東北大医)、吉田光明(東京医歯大)、大野耕策(鳥取大医)、遠藤文夫(熊本大医)。また、予定者のなかから辞退者が出た場合には、次の補欠候補に補助を行うこととした。福島義光(埼玉小児医療セ)、竹下達也(阪大医)。(松永 英)

VI. 日本人類遺伝学会教育推進委員会

本委員会の目的は、主として卒前医学教育において人類遺伝学を充実させ、ひいては国民の保健医療に貢献することで、その意義は本誌34(1)107~109, 1989で述べたとおりである。

これらの目的を達するため、本委員会はつぎの活動を行った。

1. 全国の医大・医学部の実状調査; 2. 外国の医大・医学部の実状調査; 3. 日本の医大・医学部の卒業後10年目の医師が出会った遺伝学的問題に関する実状調査; 4. 標準カリキュラムに関する研究; 5. 医師国家試験出題基準への対応。

A. 医学教育振興財団への報告

上記の目的の1~3を調査研究するため、同財団から80万円の助成金を受け、平成2年度中に調査を終了し、つぎの報告を提出した。

近藤喜代太郎、浜口秀夫、日暮 真、古山順一、笹月健彦: 卒前医学教育カリキュラムにおける人類遺伝学のあり方。平成元年度医学教育研究助成成果報告書, pp. 33-39, 医学教育振興財団, 1991

B. 標準カリキュラムの立案

上記の目的の4.を達するため、福井市における第35回大会で承認を受けて、委員会がカリキュラム原案を作り、学会長・理事・認定委員の意見で修正した案を平成2年9月10日、全評議員に送付し、内容の検討を依頼するとともに、のちに述べる3点について訊ねた。

こうして得られたカリキュラム案は、分量が多いため本報につづけて別に掲げることとして、本報では、次の点を補足する。

原案の立案に当たって、独立カリキュラムで人類遺伝学を講義する医科大学・医学部の多くが10数回程度の講義を行っていることを配慮し、全体を17大項目(1.5時間の講義と仮定してその1回分を「大項目」とする)とした。内容の配列に当たり、臨床課目の履修を前提とする事項は大項目15~17とし、大項目1~14を教養課程、大項目15~17を後期に講義する場合の便宜を計った。

なお、内容を「大項目」「中項目」としたのはCで述べる「医師国家試験ガイドライン」の形式に合わせたものである。

原案を評議員114名に送付し44名から意見を得た。他に約10名から意見がない旨の連絡を受けた。3質問に対する回答はつぎの通りであった。

【質問1】 望ましい講義回数(1.5時間×回): 0~9回-1, 10~14回-3, 15~19回-14, 20~24回-14, 25~29回-1, 30~34回-8, 35回以上-1, 無回答-2, 平均22.1回。

【質問2】 望ましい講義学年(6年制): 1年-0, 2年-3, 3年-2, 4年-6, 5年-9, 6年-1, 1+5年-1, 2+4年-2, 2+5年-10, 2+6年-1, 3+5年-4, 3+6年-1, 4+6年-1, 無回

答—3.

[質問 3] 実習の要否：不要—6, 必要—30 (比較的多かった提案をカリキュラム案の「実習」の項に掲げた), 選択制—1, 無回答—7

C. 医師国家試験出題基準の改訂に関する要望

上記の目的の 5. に当たる。事実上、同基準は多くの学校で卒前医学教育の範囲を強く規定するため、その中で人類遺伝学用語、主な遺伝性疾患名が適正に取り入れられることは、卒前医学教育における人類遺伝学の適正な位置づけを得る上できわめて重要である。

同基準は近く改訂されるので、次に掲げる要望を厚生省に提出した。

平成 3 年 4 月 15 日

厚生省健康政策局

宮島 彰 医事課長 殿

中野 恵 技 官 殿

日本人類遺伝学会 会長

松永 英

(前国立遺伝学研究所長)

同・教育推進委員長

近藤 喜代太郎

(北海道大学 教授)

医師国家試験出題基準の改訂に関する委員会の構成に関する要望

謹啓

貴課におかれましては、医師の水準向上に御努力されており、誠に有意義なことで私共も敬服いたしております。

さて、日本人類遺伝学会は、1962年にWHOが医学教育における遺伝学の重要性を指摘して以来、教育面の充実に努めて参りました。その一環として、1963年以来、関係機関、各医科大学・医学部への働きかけを繰り返して、徐々に成果を挙げて参りましたが、医師国家試験が卒前医学教育に大きな影響を与えている現状をみますと、近く改訂が予定されている「出題基準」に当学会の考え方を反映させて戴くことがなにより重要と存じております。

近年、先進国では外因性疾患が減り、遺伝的・先天的要因による疾患が相対的に増え、また高齢化とともに、がん、変性、老化など、生体の自己維持の障害とも考えるべき疾患が重要視されております。遺伝学の理解なくしてこれらの疾患に対処することはできず、卒前・卒後医学教育における遺伝学の役割を高める動きが世界的に起こっております。この問題にはWHOもつよい関心を寄せている所でございます。

このような現状に御留意下さいまして、近く発足する医師国家試験出題基準の改訂に関する委員会に当学会からの委員1名をお加え下さいますよう、関連資料2点を添えて御願い申し上げる次第でございます。

同封資料説明

資料1. 卒前医学教育カリキュラムにおける人類遺伝学のあり方

この資料は、医学教育推進財団への報告の形式で、上記の御願いに至った経過を示しております。

資料2. 卒前医学教育における人類遺伝学カリキュラム案

当学会教育推進委員会の調査研究の一部で、卒前医学教育のなかで人類遺伝学を17時間講義するとして、望ましい講義内容を示したものであります。これは委員会の原案を当学会の全評議員が検討した案で、その目的は卒前医学教育の充実であり、医師国家試験出題のための案ではありませんが、ふかい関係がございますので御参照いただければ幸いです。

(教育推進委員長 近藤 喜代太郎)

卒前医学教育における人類遺伝学カリキュラム

日本人類遺伝学会・教育推進委員会

大項目 1 ヒトの変異と遺伝学

中 項 目	小 項 目
A 生物と無生物	
B メンデルと遺伝学の誕生	
C 形質とその変異	a 変異 b 離散的形質と連続的形質 c 遺伝形質と環境形質 d 正常形質と病的形質
D 多型	a 血液型 b 主要組織適合性抗原 c 蛋白質 d DNA e 生理機能
E 多型以外のヒトの正常形質	a 計測値 b 皮膚紋理
F 双生児	a 卵性 b 形質の発現と遺伝・環境の役割
G 人種	

大項目 2 遺伝法則と形式遺伝学

中 項 目	小 項 目
A メンデルの法則	a 優劣の法則 b 分離の法則 c 独立の法則
B 遺伝子と遺伝子型	a 遺伝子と遺伝子座 b 対立遺伝子と遺伝子型 c 遺伝子の優劣
C 表現型	a 表現型と主遺伝子 b 浸透率と表現度 b 特異性・遺伝的異質性・表型模写 c 多面発現と遺伝症候群
D 遺伝形式	a 分離比 b 常染色体性優性 c 常染色体性劣性 b X染色体性優性 e X染色体性劣性
E 遺伝子の自由組換えと連鎖	a 連鎖

大項目 3 ヒトの染色体

中 項 目	小 項 目
A 染色体の形態と分類	a 常染色体 b 性染色体 c 核型 d 分染法
B 染色体の構造	
C 細胞分裂と染色体	a 細胞周期 b 体細胞分裂 c 成熟分裂 (減数分裂) d キアズマと組換え
D 性の決定	
E X染色体の不活性化	a 性染色質 b ライオニゼーション
F 細胞質遺伝	a ミトコンドリア遺伝子 b 母系遺伝

大項目 4 染色体異常

中 項 目	小 項 目
A 数的異常	a 倍数体 b 異数体 c モザイク
B 構造異常	a 欠失 b 転座 c 逆位 d その他
C 染色体異常の成因と頻度	a 染色体の不分離 b 染色体構造異常の成立機序
D 染色体脆弱部位	
E 主な染色体異常症	a ダウン症候群, 18トリソミー症候群, 13トリソミー症候群 b クラインフェルター症候群とターナー症候群

大項目 5 遺伝子の本体とその働き

中 項 目	小 項 目
A 遺伝子の本体	a 核酸の一次構造 b DNA の種類 b 遺伝子の数, DNA の長さ c ゲノム DNA 上の遺伝子の構造
B 遺伝子 DNA の自己複製	
C 遺伝情報の発現	a 遺伝情報の転写 b 遺伝情報の翻訳
D 遺伝情報の発現調節	a アンチセンス鎖による調節 b 遺伝子の転写領域と調節領域 c オペロン説 d シスおよびトランス制御

大項目 6 突然変異と放射線遺伝学

中 項 目	小 項 目
A 突然変異の種類	a 染色突然変異と遺伝子突然変異 b 復帰突然変異 c 誘発突然変異と条件致死変異 d 生殖細胞の突然変異 e 体細胞の突然変異
B 突然変異の原因	a 物理的因子 b 化学物質 c 細胞内因子
C DNA の修復とその異常	a DNA の修復機序 b 色素性乾皮症 c その他の DNA 修復異常症
D 放射線の遺伝的影響	

大項目 7 遺伝生化学と分子病

中 項 目	小 項 目
A 代謝の遺伝的制御	a 一遺伝子一酵素説
B 先天性代謝異常症	a 遺伝的阻害と蓄積症 b 糖質代謝異常症 c アミノ酸代謝異常症 d 脂質代謝異常症 e 核酸代謝異常症
C 分子病の発症機構	a ヘモグロビンの代謝と異常症 b 色素性乾皮症 c 遺伝子治療の可能性

大項目 8 体細胞遺伝学と遺伝子地図

中 項 目	小 項 目
A 遺伝子マッピング	a 染色体地図 b 細胞雑種形成法 c <i>in situ</i> 分子雑種形成法 d 染色体ソーティング
B DNA マーカーによる連鎖検定	a 制限酵素断片長の多型 (RFLP) b (VNTR)*
C 代謝性疾患と遺伝子	a DNA 診断

* 日本語が確定しないが、繰り返し配列数の多型としておく。

大項目 9 腫瘍と遺伝子

中 項 目	小 項 目
A 遺伝する腫瘍	a 常染色体優性の遺伝性腫瘍 b 常染色体劣性疾患に合併する腫瘍 c いわゆる癌多発家系
B 癌遺伝子	a ウイルスの癌遺伝子 b 細胞性癌遺伝子 c 癌遺伝子の活性化機構
C 腫瘍抑制遺伝子	
D 腫瘍と染色体異常	

大項目 10 遺伝子工学と逆行遺伝学

中 項 目	小 項 目
A 遺伝子組換え技術	a 遺伝子ライブラリー b PCR 法 c 遺伝子クローニング
B 遺伝子工学の医学への応用	a 診断 b 治療

大項目 11 多因子遺伝と連続的形質

中 項 目	小 項 目
A 連続的形質とその近親相関性	a ポリジーンと多因子遺伝 b 連続的形質の変異 c 連続的形質の近親相関性 d 遺伝率 e 連続的形質の安定性と淘汰
B 連続的形質の異常な偏りと多因子性疾患	
C 準連続的形質	a 準連続的形質の成り立ち b 発病のしきい説

大項目 12 集団遺伝学

中 項 目	小 項 目
A 集団の遺伝的組成	a 遺伝子頻度 b 任意交配集団 c ハーディ・ワインベルグ法則
B 集団の遺伝的組成に影響する要因	a 近親婚 b 突然変異 c 淘汰 d 適応度
C 偶発的なゆらぎ	a 隔離された小集団 b 遺伝子の機会的浮動 c 移住
D 分子集団遺伝学	a 進化

大項目 13 薬理遺伝学と生態遺伝学

中 項 目	小 項 目
A 薬剤の量と効果の関係	
B 薬剤に対する異常反応	a アセチルトランスフェラーゼの異常 b 偽コリンエステラーゼの異常 c ブドウ糖-6-リン酸脱水素酵素の異常 d NADH (還元型ニコチンアミドアデニンジヌクレオチド)-デヒドロゲナーゼの異常 e アリルヒドロカーボンヒドロキシラーゼの異常 f 薬剤過敏性と異常反応 g アルコールに対する感受性
C 生態遺伝学	

大項目 14 免疫遺伝学と生体防御

中 項 目	小 項 目
A 血液型	a 構造 b 輸血 c 血液型不適合
B 免疫グロブリン	a 構造 b 遺伝子の再構成
C T細胞レセプター	a 構造 b 遺伝子の再構成
D 主要組織適合抗原系	a 構造 b 多型 c 免疫応答との関係 d 疾患感受性との関係 e 臓器移植

大項目 15 遺伝性疾患の成り立ち

中 項 目	小 項 目
A 有性生殖とその過誤 B 生命の有限性と老化 C 発病に遺伝が関与する機序 D 単純な遺伝に従う疾患	a 単因子遺伝性疾患の種類 b 常染色体性優性遺伝に従う疾患 c 常染色体性劣性遺伝に従う疾患 d 伴性劣性遺伝に従う疾患 e 症候の成り立ち
E 染色体異常* F 多因子性疾患* G 外因と遺伝的感受性の共同でおこる疾患* H ヒト集団の遺伝的荷重	

* それぞれ大項目 4, 11, 13 に加えた臨床的事項

大項目 16 遺伝性疾患の臨床

中 項 目	小 項 目
A 疾患単位の識別 B 単純な遺伝に従う疾患 C 染色体異常* D 多因子性疾患* E 外因と遺伝的感受性の共同でおこる疾患*	a 診断と遺伝形式の判定 b 治療 a 多因子性疾患を疑う傍証 b 重要な多因子性疾患 a 薬剤過敏症など医原性の疾患 b とくべつな環境要因でおこる疾患

* それぞれ大項目 4, 11, 13 に加えた臨床的事項

大項目 17 遺伝性疾患の予防と遺伝相談

中 項 目	小 項 目
A 環境変異原の管理 B 遺伝的疾患の早期発見システム C 家系登録 D 遺伝性・先天性疾患と母子保健サービス E 遺伝相談 F 家族計画	a エームス試験 a マス・スクリーニング法 a 目的・場所・相談担当者 b 家系内での再発率の推定 c 保因者とその診断 d 出生前診断 e 倫理

大項目 18 その他の内訳

中 項 目	小 項 目

実 習 (2 回)

-
1. 血液型, PTC 味盲など, 多型形質をクラスメートと同居近親で検査し, 遺伝形式, 遺伝子頻度などを求め, ヒトの変異のあり方を体験する. 家系図の作り方を学ぶ.
 2. ある段階まで準備した材料で染色体標本をつくり, 核型判定を体験する.
 3. 臨床遺伝学 (できれば臨床実習の中に位置づける)
 5. その他, 実施可能な事項
-